

もくじ 千住ゆかりの濱田家と日本画家、渡辺省亭 … P1  
行政文書に見る足立区の水害記録(十八・終) … P3 はい、文化財係です②① … P4

# 足立史談

第 632 号

2020 年 10 月 15 日  
足立区立郷土博物館内  
足立史談編集局  
〒120-0001  
東京都足立区大谷田 5-20-1  
TEL 03-3620-9393  
FAX 03-5697-6562

## 千住ゆかりの濱田家と 日本画家、渡辺省亭

小林 優



図1 渡辺省亭《群鶏図屏風》 明治三十一年(一八九八)  
絹本着色二曲一隻 当館蔵・濱田家寄贈

前号に続き、今秋開催の特別展「名家のかがやき―近郊郷士の美と文芸―」の関連情報をお届けします。

前号では、千住仲町の旧家である石出家と深い縁戚関係を結んできた、埼玉県杉戸町の濱田家と、同家と作品のやりとりをした人物として、特に明治時代の日本画家、渡辺省亭(わたなべせいいてい、一八五〇―一九一八)について、同家に残る葉書資料の内容をもとに紹介しました。

今回は、そうしたやりとりを通じて濱田家にもたらされ、今日まで伝えられた省亭の作品をご紹介します。

### ■和洋を股に掛けた画家、渡辺省亭

渡辺省亭の経歴を概観すれば、嘉永四(一八五二)年、久保田藩(現秋田県秋田市)に仕える札差の子として、江戸の神田に生まれます。本名を義復、幼名を貞吉(後に政吉と改める)といい、幼少より質屋の奉公に出ますが、やがて画業を志し、はじめに弟子入りを望んだ柴田是真の勧めをうけて、十七歳で絵師の菊池容斎(きくちようさい、一七八八―一八七八)の内弟子となりました。

容斎の下で腕を磨いた省亭は、明治八(一八七五)年、西洋各地で催される万国博覧会への出品物も含め、日本の美術工芸品を制作・輸出する国策貿易会社、起立工商会社の雇いとなり、陶磁器や漆工品の下絵図案にその手腕を発揮することとなります。そしてこ

れが、省亭の画業の大きな転換点となりました。

明治十一(一八七八)年、自らの絵画作品が第三回パリ万博の出品作にも選ばれていた省亭は、起立工商会社から派遣されてパリへ渡ります。そして、同地でエドゥアール・マネやエドガール・ドガといった印象派の画家や、日本の美術・文化を愛好する文化人たちと交流し、自身の日本画法を彼らの前で披露すると共に、現地で目の当たりにした写実的な西洋画法に大いに刺激を受けたのです。

二年後、帰国した省亭は、西洋で目にした画法を取り入れた絵画や工芸図案の実践に取り組みます。最も代表的な仕事としては、明治四十(一九〇七)年前後に七宝家の濤川惣助(なみかわそうすけ、一八四七―一九一〇)と組み、省亭が様々な花鳥をモチーフとする下絵を描いて制作した、迎賓館(赤坂離宮)大食堂「花鳥の間」を飾る三十面の楕円七宝額が知られていますが、他にも万博出展や皇居造営にかかる工芸下絵の制作など、政府主導による事業への絵画・工芸下絵制作に積極的に臨み続けました。

伝統的な日本画法に西洋の写実性を加味したその画風は、日本はもとより、西洋でも個展が開かれるなど高く評価され、明治日本を代表する芸術家の一人として、国内外に多くの作品を残すこととなったのです。

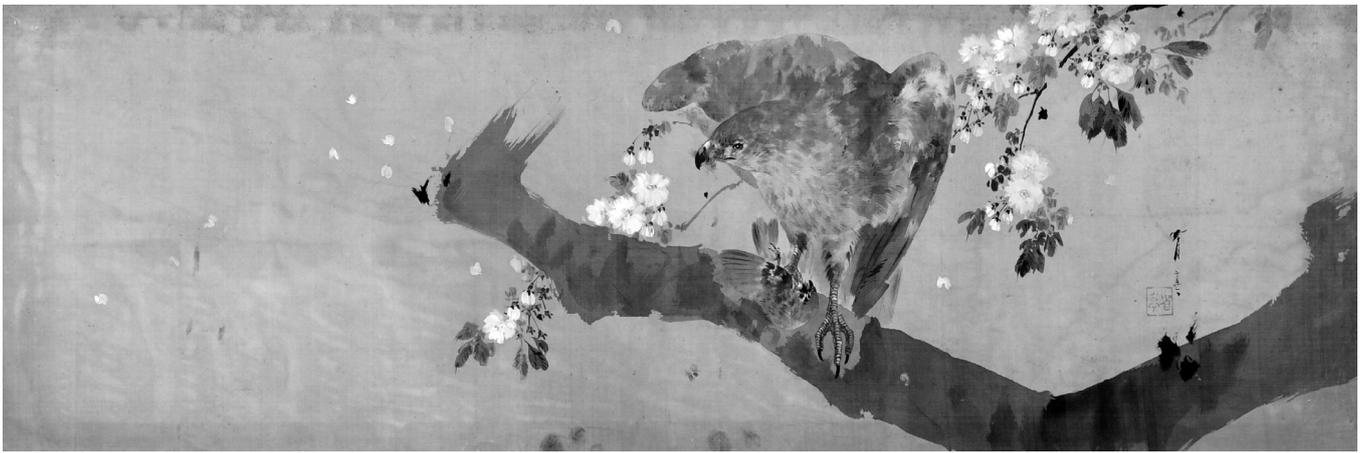


図2 渡辺省亭《猛禽図》 明治時代後期 絹本著色 当館蔵・濱田家寄贈

■濱田家に伝来した省亭作品

前号で紹介した省亭別宅からの葉書の投函年月日などを参照すれば、省亭と濱田家がつながりを持ち、作品のやりとりが最も盛んだったのは、主に明治二十年代末から三十年代前半頃であったと思われます。この時期、省亭は第五回パリ万博（明治三十三年開催）に向けての絵画・工芸下絵の制作に取り組みつつ、春陽堂などの出版社と組んで小説の口絵・挿絵の制作や、画集発刊の計画などに臨んでいました。

葉書には、「おかめ」や「鯉」の図などを依頼していたことが記されており、当時、濱田家が相当数の作品を省亭へ依頼していたことを物語っています。濱田家の伝来作品・資料の内、葉書に記された内容の図の現存は確認できませんでしたが、こうした依頼による産物と見られる幾つかの省亭作品が確認されています。

○《群鶏図屏風》（図1）

その一つが、《群鶏図屏風》です。縦長の二面の画面で構成された二曲一隻の押絵貼屏風で、右図には力強い水墨で描かれた芭蕉の下に群れる四羽の雄鶏が、左図には大人しく地面をつつく一羽の雌鶏が、落款の記される左上にたっぷりとした余白を残しつつ描かれています。

省亭は西洋絵画の画法から強い影



《群鶏図屏風》右図の部分拡大

響を受けつつも、その画題・基本描法に関しては近世以来の花鳥画の伝統と手法を基軸としていました。「鶏」は、その中で省亭が好んだ画題の一つであり、本作もまた、省亭花鳥画の特色がよく表れています。鶏の目は様式化せず、生物としての生々しさを再現するように描かれ、トサカや嘴下の肉髯（にくぜん）は赤色の濃淡によって実体的な立体感を伴って構築されています。鶏の体は四羽ごとの色の描き分けと水墨・色彩の濃淡を駆使し、個と群としての立体感を描出しています。

○《猛禽図》（図2）

もう一点が、《猛禽図》です。屏風

である《群鶏図屏風》と違い、横長の絹地を画面とした扁額装の作品ですが、その画面を活かすように白い花を咲かせた桜が右から伸び、そこから舞い散る白い花びらが左へと流れる構図となっています。桜舞う風雅な風情の一作ですが、猛禽の右足には捕らえたばかりの雀が掴まれており、華憐な中に緊迫した緊張感を宿しています。

写実的な目や羽毛の描写などは、《群鶏図屏風》同様の特徴を見せており、制作時期を示す年記こそないものの、明治三十年の前後に、濱田家当主から依頼されて省亭が制作した一作であると見られます。

今日に伝えられたこうした作品や資料の数々は、当時の芸術家たちの生業が大規模な国家事業や財閥などとの繋がりでだけでなく、いかに東京とその近郊や、関係する各地の名士とのつながりに支えられていたのかを伝えてくれます。そのつながりを紐解いていくことこそ、近代文化の本質を読み解く、大きなヒントとなることでしょう。

（郷土博物館学芸員）

前号の訂正

石出家・濱田家と大名家の関係で例示した杉戸町所在の石碑は東久世家の揮毫でした。お詫びして訂正いたします。

（文化遺産調査担当）

## 行政文書に見る

## 足立区の水害記録(十八・最終回)

山崎尚之

## ■日誌【十二】(明治四十三年水害)

前号では「日誌」の八月二十日分までを載せました。「日誌」は二十八日で終了しており、終わりに近づくにつれて一日分の情報量が減っていきます。最後の八日間の記事を見ると、陸軍の救護隊の引き上げや赤十字社員の来訪、病人の入院、寄贈品(前田侯爵家から筵千枚など)についての記事が目立つ程度で、ほかは職員の出張と帰庁が主なものです。病人の入院先としては、赤十字病院(現在の渋谷区広尾の日本赤十字社医療センター)、三井慈善病院(現在の千代田区神田和泉町の三井記念病院)が出てきます。

## ■四十年と四十三年

## ―二つの水害記録の違い―

明治四十年の水害と明治四十三年の水害は、ともに大きな被害を残した災害でしたが、四十三年の水害記録のほうが圧倒的に多く残されています。そして、南足立郡役所における「日誌」としての書かれ方(残され方)にも大きな違いが見られます。二つの水害記録の違いについて考察します。

四十年の水害では、具体的に町村で起きたトラブルとその対応が記されていますが、四十三年の水害ではトラブル

ルの記載はありません。わずか三年で越水や破堤をめぐる村民間の協力やトラブルがなくなったとは思えません。四十三年の水害記録には残されていません。これは、「日誌」の記載方針に変化があったのではないかと考えられます。

四十年の水害時には、住民に寄り添った視点から記載を行ったのに対して、四十三年の水害時は、あくまで行政の側から対処を行った視点による記載、すなわち、その場のトラブルといった真に迫った様子ではなく、あくまで事故の終了後に視察したことだけを記載しています。それはまるで、具体的な記載は新聞や『風俗画報』などにまかせる、とでもいうようにさえ感じられます。

では、三年間で記載の変化をもたらしたものは何だったのでしょうか。それは、四十年と四十三年の水害の時では、職員の事務量に変化があったのではないかと考えられます。たとえば、町村の炊出しの増加への対応(白米や副食物の東京府への請求や町村への配布)や避難者の救助、運搬用の舟の借り入れ、四十年にはなかった侍従視察への対応など、対処すべき出来事が多くなったため、「日誌」の記載を簡略にした。：。事務が増えた分、記録すべきことも増えただため、一つ一つを具体的に記載できず、簡単に箇条書きにした。：。好

意的にみると、以上のように考えられます。さもなければ、こんな「日誌」など役所としては記録が不要だから簡略に書き残しておけばよい。：。ということだったのかもしれない。

たとえば、『読売新聞』四十三年八月二十一日条の「役場と警察の不評」という記事には、「北千住の町役場と警察は他に比して少くとも満足とは云ふ事が出来ない。：。第九、第十一両中隊の兵士が給水其他に汗水を流して働いているのに、手を袖にして傍観して悪口を云ふなどは聞捨てにならない。：。」と書かれています。決まった内容の書き込みが多い「日誌」と、新聞に書かれた役所の職員に対する不評は、同じ出来事に対する異なる視点による表現だと思われる。

## ■水害のその後

四十三年の水害の被害が大きかったことよって、荒川放水路の開削計画がより進められることとなり、昭和五年に現在の岩淵水門より下流の「荒川」が開通します。これにより、荒川の氾濫による水害の危険性はだいぶ低くなりました。

しかし、荒川開通の十七年後、昭和二十二年のカスリーン台風の時、足立区内の荒川では破堤や溢水はありませんでしたが、上流の熊谷では破堤して水があふれました。また、利根川では栗橋の上流で決壊して東

京の葛飾・江戸川まで洪水が南下し、足立区も中川と綾瀬川にはさまれた地域が水浸しになりました。そうした被害から、その後は水門の整備や排水場の設置などがすすみ、浸水被害は減少していきました。

ところが、最近では「百年に一度の大雨」といわれるような降雨が起こるようになり、荒川でも水害発生の可能性が出てきました。特に、昨年十月の台風十九号による降雨の際は、荒川土手の京成本線荒川橋梁部分が他の地点より約三メートルほど低いため越水の危険性が高まり、国土交通省荒川下流河川事務所では土嚢を設置して備えたこととです。また、今年の一月と八月には、足立区を含む江東五区の区長が国土交通大臣にこの橋梁の架け替えを早期実施するように要望しています。

以上、長期にわたって百年以上前の水害の記録について述べてきましたが、残念なことに、現在でも水害はなくなつたわけではありません。かえって、最近では発生危険性が高まっているようです。連載当初は、知っている人の少なくなった明治の水害記録を紹介することに意義を感じていましたが、徐々に現在の水害と結びつけて考えるようになりました。ここで紹介した足立の人々による水害への対応の様子が、何かの参考になればと思っています。

はい、文化財係です②①  
**鹿浜の歴史を  
 伝える供養塔**



写真1



写真2



地図

十月に入りいよいよ秋本番といった気候になってきました。史跡巡りには、絶好のシーズンと言えます。新型コロナウイルス感染拡大防止のための十分な対策を講じながら、文化財を見に行ってみるのもいいかもしれません。そこで、今回は路傍にある文化財をご紹介します。

今回ご紹介するのは、登録有形民俗文化財の「供養塔」三基です(写真1)。供養塔は、鹿浜五十七の路傍に三基並んで立っています(地図)。現在は風雨から保護するための覆い屋に守られており、文化財であることを示す説明板や石碑が並んで立っているので、すぐに発見することができます。

写真1の右から順に、天保五年(一八三四)の拝礼供養塔・天保十三年(一八四二)の地藏菩薩供養塔・寛政八年(二七九六)の普門品(ふもんぼん)供養塔です。

三山や坂東三十三箇所・西国三十三箇所といった日本各地の霊山・霊場が刻まれ、「天下泰平」「国土安全」という願いも彫られています。遠く離れた場所の霊場が刻まれています。区、区内各所にこうした碑が立っており、遠方の神仏に対する信仰心を伝えています。

■**地藏菩薩供養塔** この供養塔には、地藏菩薩が彫られています。地藏菩薩は日本では子供の守護尊としても信仰されており、この像も左手にかわいい子供を抱いています(写真2)。地藏菩薩と子供は顔が若干摩擦してはいますが、地藏菩薩を照らす輪光(りんこう)や右手に持っている錫杖(しゃくじょう)、着ている服の衣文(えもん・しわ)など、彫刻全体の保存状態は比較的良好で、彫った人物の息遣いを感じることができます。

■**普門品供養塔** 普門品とは、法華経の第二十五品観世音菩薩普門品のこと、観音経としても知られ、観世音菩薩の衆生救済を説いています。この供養塔は道標も兼ねており、千住や六阿弥陀二番目の寺である小台の延命寺(江北の恵明寺に合併)、蔵宿や鳩ヶ谷町などへの距離が記されています。文政十二年(二八一九)に成立した『江戸近郊道しるべ』という本にも紹介されています。

**東京都主催「東京文化財ウィーク2020」**

今年も、都内各地で文化財イベントが開催されます。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、例年と異なる部分がありますので、ご注意ください。

期 間 10月1日(木)～11月30日(月)

イベント パンフレット配布が中止となったため、詳しくは東京都のホームページをご覧ください。

特別公開事業  
 例年、西新井大師総持寺・性翁寺・明王院の三カ寺で開催されていましたが、今年度は**中止**となりました。

江領鹿濱邑」と記されています。江戸時代の鹿浜村は、將軍家の菩提寺である東叡山寛永寺(台東区)の所領でした。また、「下足立郡」(足立郡の南側)は、正式な地名ではありませんが、戦国期から使われており、人々の地域に対する認識がわかります。わずかばかりの文言ですが、鹿浜村の歴史をよく伝えていきます。

かわいらしい彫刻や、貴重な銘文など、よく見ると味のある文化財です。ぜひ一見下さい。

(文化財係学芸員 佐藤貴浩)